

第23回〈ケア〉を考える会-岡山

■日時 **2016年1月23日(土) 14:00~16:30**

■会場 **川崎医療福祉大学 本館6階 6001 演習室 (定員35名)**

http://www.kawasaki-m.ac.jp/mw/access/index.php/*

※建物の1階(防災センター)から備え付けのスリッパに履き替えてお上がり下さい。

エレベーターで6階へ行きますと、降りた正面に案内標識があります。

駐車場は、福祉大学の職員・学生駐車場(病院とは道をはさんで北側)をご利用ください(1時間100円)。

■会費：無料 どなたでも参加できます。お気軽にご参加ください。



■テーマ **「ケアを語る流儀と作法」**

鷺田清一・徳永進 著 「ケアの宛先」(雲母書房)

P.97~P.138 を読んで、話し合います。



「ケアの宛先」ノート ②

……「ベッドサイドからの哲学」(第22回時のノートです)

▼医療・看護・介護の世界は、こういうときはこうすべきというマニュアルでこれまでやってきましたが、そうじゃないものを発見すること、ベッドサイドや介護施設で日々起こっていることの中から言葉を「汲みとって」いくという態度こそ、臨床を哲学するという事なんですね。(徳永/82頁)

それが、ごくありふれた言葉だってことが大事なんだと思います。(鷺田/82頁)

▼みんなの気持ちはグラグラ揺れ動いていて、一人ひとりの中に決めかねるものがいっぱい詰まっているんです。それぐらい、どうしようかと答えのない状態を悩むんですね。そんな時、「大切なものは、ほんやりしている」という鶴見(俊輔)さんの言葉を思い出して、あーそうなんだと。(徳永/86頁)

▼現場というのは、それこそ学校で習ったことがそのまま通用しないところで、つまり予期せぬことが起こるし、知らないコンテキストがいっぱいある。それを知らないまま判断したら必ず変なことになるという、一筋縄で行かへんところでしょう。しかも、ある答えを選んだら、必ずそれによって被害を受ける人が出てくるわけで、みんながバンザイとなる答えは絶対あり得ないですよ。(鷺田/86頁)

ないですね。それが39年たっても臨床から離れられずにいる理由です。(徳永/87頁)

▼究極の解決やなしに、相対的な解決を探すということね。(鷺田/91頁)

▼臨床というのは(…)机の上では決してわからないことが時々刻々、生起している場なんですね。そこが不思議だし、おもしろい。(鷺田/94頁)

▼介護職や看護職にとって、臨床という場はある意味で汲めども尽きぬ宝庫なんですよ。(鷺田/95頁)

■呼びかけ人

大賀由花(赤磐医師会病院/透析療法指導看護師)、河合清志(社会福祉士)、小林真美、清水昭雄(管理栄養士)、田中順子(川崎医療福祉大学リハビリテーション学科/作業療法士)、林道也(社会福祉士)、平松邦夫(社会福祉士)、松川絵里(カフェフィロ代表/大阪大学 CSCD 特任研究員)

■参加申し込み・問い合わせ

884michiya@gmail.com 090-5366-1497(林)

※ ホームページもご覧ください ⇒ <http://okayama-care.jimdo.com/>



「〈ケア〉を考える会-岡山」とは……

▼岡山(倉敷)で、〈ケア〉について学び考えています。

〈ケア〉といえば、「看護」「介護」「支援」「世話」などが頭に浮かびます。超高齢社会を生きる私たちにとって、切実な課題の一つです。そして、〈ケア〉は、もっと広く捉えることもできます。たとえば広井良典氏は、ケアを「人と人との間の『関係性』という意味に理解してみたい」と述べ、さらに、個人がコミュニティや自然などとつながっていくような方向でもケアを考えます。「『ケアの哲学』とでもいうようなものが必要」とも言っています。また、鷺田清一氏は「臨床哲学」の重要テーマの一つに「ケア論」を置き、「ケア」の奥深さをさまざまに説いています。それに、「死生観」、「生」と「死」について、リビングウィル、終末期医療も、〈ケア〉を抜きには考えられません。

この会では、〈ケア〉について、身近なところから理念的なものまで、そして、狭い意味から広い意味まで、幅広く深く考えていきます。

▼この会の参加者は、医療・看護・介護・福祉・教育などの現場、または地域や家庭などで〈ケア〉に関わっている方、大学や学校で〈ケア〉の教育・研究に携わる方や学んでいる方、さらに、その他、〈ケア〉に関心や関係のある方などです。〈ケア〉に関わる人たちが学び交流することで、明日からの力を得る〈場〉となることを願います。この会は参加者の「つながり」を大切にします。